

V まとめ

今回の調査区は遺跡範囲の東端にあたる。遺跡の南には新屋敷東遺跡がある。新屋敷東遺跡は、国道17号線深谷バイパスの建設に伴って調査され、縄文時代後・晩期の遺構をはじめ、古墳時代を中心とする集落跡であることが明らかとなっている。今回の調査区は河川跡を挟んで新屋敷東遺跡と隣接しており、関連する時期の遺構の存在が予想された。結果は調査範囲が極めて限定されていたこともあって縄文時代の住居跡2軒の他は溝跡、土壌等であった。

縄文時代の遺構は後期の住居跡2軒、土壌5基と判断された。これは新屋敷東遺跡で検出された8軒の住居跡と同様の時期であり、集落が新屋敷東遺跡より北側にも展開していたことが確認された。

古墳時代の住居跡は検出されなかったが、これは調査面積が狭かったためと思われる。本文中に資料化できなかった遺物の中には、模倣杯の小破片等も含まれている。遺跡の南側には旧流路を挟んで新屋敷東遺跡、本郷前遺跡、上敷免遺跡当該期の集落が存在することから、周辺にこの時期の遺構が存在することは十分に予想される。

近世については、4区第1号土壌及び2区から陶磁器、石製品がやや纏まって出土している。周辺では深谷市居立遺跡でこの時期の遺跡が調査されている。居立遺跡では溝跡及び土壌等から17世紀後半を中心とする陶磁器類がまとまって出土している。溝跡は直角に曲がるもので付近にある旧永楽寺との関係が指摘されている(岩瀬：1995)。

深谷市、特に明戸周辺の妻沼低地で今後検出されることが予想されるものに、近世の瓦焼成遺構がある。次に今回の調査検出された瓦焼成遺構について若干の検討を行っておきたい。

埼玉県の近世以降の瓦については「埼玉のかわら」(埼玉県立民俗文化センター：1986)に詳しい。以下これに基づいてみていくこととする。

深谷市周辺をはじめとする埼玉県内の瓦は主に江戸

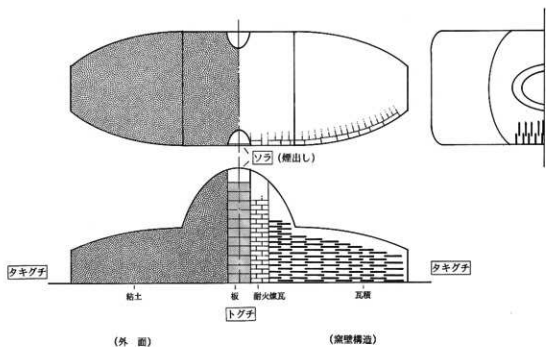
を中心に近在に供給されていた。県内で創業の最も古いのは足立郡上戸田村(戸田市)の日坂兵四郎家で正徳2年(1712)創業とされる。この他にも荒木村(行田市)、馬込村(岩槻市)等に創業年が享保元年とされる例がある。深谷市では明戸の蒔塚安雄氏所蔵の鬼瓦に「享保二十年八月吉日 荒井村瓦屋善左衛門」の銘があり、江戸で一般に瓦葺が普及するのは吉宗の時代以降で、享保5年(1720)にそれまで禁止されていた町屋の瓦葺を許し、火災に対してこれを奨励した後といわれる。一般には埼玉県の瓦業は江戸近郊産業として文化文政以降盛んになったとされる。

これらの瓦はどのような窯で焼成されていたのであろうか。深谷周辺では江戸時代の瓦窯の調査事例はないと思われるが、ダルマガマと呼ばれる窯或いはそれに近い構造の窯であったと思われる。ここでは昭和まで使われていたダルマガマの構造を見ることによって検討する手掛かりとした。

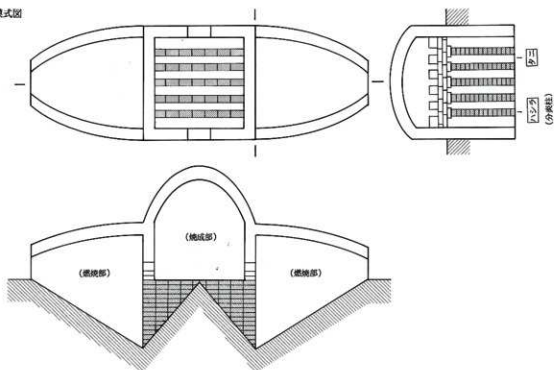
ダルマガマの構造については前述「埼玉のかわら」にも詳しく載っている。また、これとは別に深谷市新井に残る窯について実見したので合わせて見ていきたい(註1)。第39図は「埼玉のかわら」を参考にしながら、実見したものを加味して作図したものである。細かい部分については不明な点もあるため、作図にあたっては推定を含め模式化してある。

ダルマガマの構造は3室に分かれる。中央に瓦を入れて焼く焼成室があり、その両側に燃料を燃やす燃焼室がある。焼成室は平面方形を呈し天井部はアーチ状である。側面に製品を出し入れするための「トグチ」と呼ぶ入り口がある。燃焼部は、窯の下部を断面W字形に掘り窪める半地下式である。中央の山形になる部分の斜面に「ハシラ」或いは「タニ」と呼ばれる分炎柱が作られ、炎は両側から焼成室に入るようになっていく。これは製品の質を均一化するために、両側から炎を入れることによって、焼成室内の火の廻りを均一

第39図 グルマガマ模式図



内部構造模式図



にしようとしたものと考えられる。ダルマガマは構造的には平窯の発展形態と捉えられる。

窯の規模については、正式に測量していないため「埼玉のかわら」を参考にすれば、全長18尺で、幅は6尺である。焼成室は6尺四方で、高さも6尺である。燃焼室は長さが6尺で焚き口に向かって細くなる。高さは地下部分が3.5尺、地上部分が2.5尺で計6尺となる。焚き口の大きさは記述がないが、実見したものは高さ35cm、底辺44cmのアーチ状である。ただし、大きさや構築方法は窯を造る職人によって微妙に違ったようである(註2)。現在の窯は「ホントニガマ」と呼ばれ分炎柱が5本で、一回に1000枚ほどの瓦を焼くのが標準のようである。以前は規模が小さく「ヨタニガマ」と呼ばれたものは分炎柱が3本で一回の焼成単位は500~600枚であった。「カタクチガマ」は「タキグチ」が1か所焼成単位は400枚とされる。現在の形は大正から昭和にかけてできたと思われる。

今回の調査では残念ながら遺構を平面的に捉えることはできなかった。断面では火床部と思われる赤化した層の上に、間層を挟んで、崩落した天井部と考えられる黄褐色の硬化した層が観察される。火床面と考えられる面の両側には備溝状の掘り込みが見られるが、それより下には下部構造にあたると思われる痕跡は見られない。溝の両側は緩やかな傾斜で立ち上がっている。長さは約3.9mあり、溝に挟まれた赤化部分を焼成部と考え、溝の外側を燃焼部と考えるならダルマガマと同じ3室構造と理解できる。この焼成部は1.4mと推定され、全体の長さのはほぼ1/3にあたる。この比率は現在のダルマガマと同じである。ただし、中央部の赤化した部分を焼成部とし、その両側を燃焼部と仮定するには、両側に熱を受けた痕跡が少なすぎ、問題があるように思われる。この断面がどの部分にかかったものか不明であるが、長軸方向にかかったものならば窯構造のおよその全体像を表していると考えられるが、短軸方向ならば全体像の把握は困難である。仮に長軸方向のものとするなら半地下式の燃焼部が無かったものと考えられ、現在のダルマガマとは構造を異にす

と思われる。短軸方向なら半地下式の部分がわからない可能性があり、またそれが焚き口に近いほうなら分炎柱も検出されないことになる。ただし、短軸方向と考えるには規模が大きすぎるように思われ、いずれにしても1面だけの断面観察で全体像を推定するには限界がある。今後の資料の増加を待ちたい。

次に遺物について検討する。

検出されたのは窯壁と考えられる破片である。いずれの破片もスサ痕及び瓦がけけた痕跡が明瞭で、最近まで使われていたダルマガマの窯体の構築法と同じである(註3)。

検出された窯体は拳大から人頭大ほどの粘土塊で、窯内面にあたる1乃至2面が平坦である。平坦面を2面持つものの特徴は、その平坦面が内角ではなく外角面にあたることである。窯内部で角にあたる部分は四隅が考えられるが、この部分は内角を呈する。外角を示すのは製品を出し入れする「トグチ」の柱にあたる部分である。他に外角を呈するのは分炎柱の両端とダルマガマの分炎柱の上部に見られるマドの部分であろう。分炎柱及びマドの部分は、現存するものは耐火煉瓦が使われているが、それ以前は窯壁と同じく枝瓦を半分に分割したものを用いて粘土を充填していた。後2者については遺構の内容が不明なため可能性はあるがこのことは前者と考えておきたい。第36図13・14については焼成部壁面と天井部の接点あたりと考えておきたいが、細かい点で矛盾する部分もあり保留しておきたい。

註1 実見したのは深谷市新井所在の橋本利平氏所有のダルマガマである。現状は焼成部の天井が崩落しているが他の部分は良好に残っている。築窯は昭和26年4月で、翌年から焼成を始め、昭和58年まで稼働した。

註2 橋本氏の窯は、焼成室内部は一辺2 m5cmであった。

註3 ダルマガマの窯体の構築法に関して「埼玉の瓦」に詳しいが、橋本氏の窯についても半裁した瓦を、粘土を充填しながら積み重ねていくという方法で構築されている。

参考文献

- 青木克尚 他 1997『深谷城跡（第5次）』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第51集
- 磯崎 一 1989『新田裏・明戸東・原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第85集
- 岩瀬 譲 1995『前・居立』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第151集
- 大屋道則 1994『清水上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第152集
- 柿沼幹夫 他 1977『前島・島之上・出口・芝山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第12集
- 木戸春夫 1995『根絡・横間栗・関下』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第153集
- 木戸春夫 1999『小沼耕地遺跡II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第247集
- 古池晋禄 1992『根岸遺跡』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第34集
- 古池晋禄 1990『小台遺跡（第4次）』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第24集
- 古池晋禄 1993『深谷市市内遺跡V 道仙遺跡・庁鼻和城跡』
埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第37集
- 古池晋禄 1994『庁鼻和城跡（第3次）』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第38集
- 埼玉県 1983『新編埼玉県史 資料編1』
- 埼玉県教育委員会 1994『古墳詳細分布調査報告書』
- 埼玉県教育委員会 1988『埼玉の中世城館跡』
- 埼玉県立民俗文化センター 1986『埼玉のかわら』埼玉県民俗工芸調査報告書第4集
- センター
- 佐藤康二 1998『砂田前遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第198集
- 澤出晃越 1988『深谷市内遺跡群I 壺場松原遺跡第2次・上敷免北遺跡第2次』
埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集
- 澤出晃越 1985『深谷町遺跡』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
- 澤出晃越 1983『城下遺跡』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集
- 澤出晃越 1987『深谷城跡』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集
- 鈴木孝之 1996『深谷城跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第174集
- 鈴木敏昭 1999『横間栗遺跡』平成10年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 田中広明 1992『新屋敷東・本郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集
- 知久裕昭 他 1998『常盤町東遺跡』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第57集
- 堀口萬吉 他 1986『日本の地質3 関東地方』共立出版
- 村田章人 1993『原ヶ谷戸・滝下』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第127集
- 村松 篤 1997『埼玉県北部地域の様子』『埼玉考古—特集号 埼玉の旧石器時代—』別冊第5号
- 吉田 稔 1991『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集

写真図版



1区全景



1区10号土壙遺物出土状況



5区全景



6区全景



2区全景



2区第1号沟迹·第1号土坑



3区全景



4区全景



4区第1号土坑



土壤出土器物 (第14图3)



土壤出土器物 (第14图4)



包含層出土器 (第19图1)



包含層出土器 (第19图2)



包含層出土器 (第19图3)



包含層出土器 (第19图4)



包含層出土器 (第19图6)



包含層出土器 (第19图7)



包含層出土土器 (第19圖8)



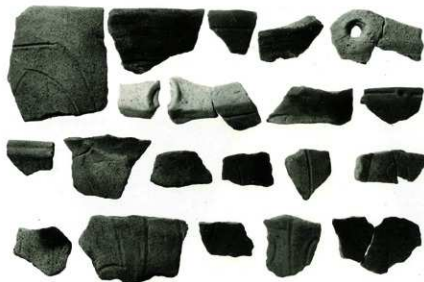
包含層出土土器 (第19圖9)



包含層出土土器 (第19圖5)

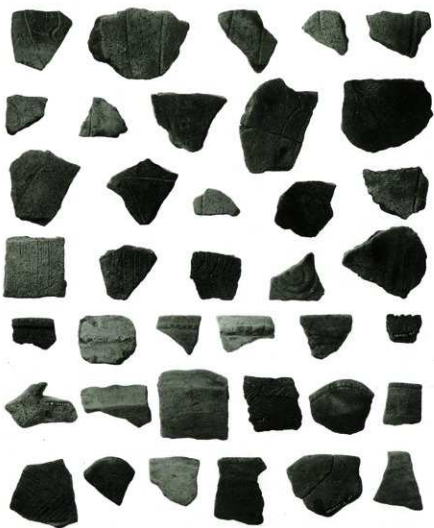


包含層出土土器 (第19圖10)

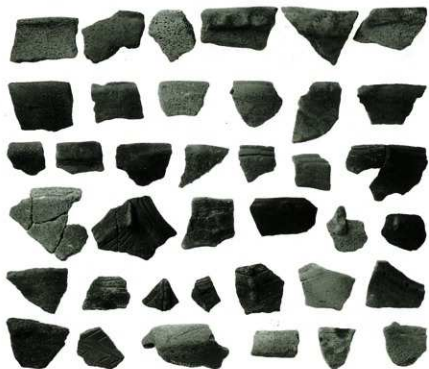


第1号住居跡出土土器 1
(第7圖)

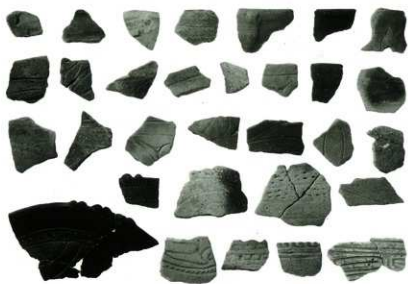
第1号住居跡出土土器2
(第7图)



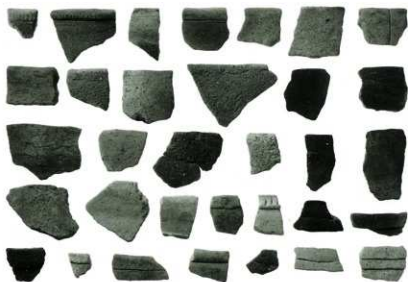
第2号住居跡出土土器1
(第8图)



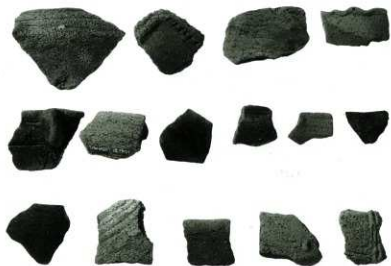
第2号住居跡出土土器2
(第8图)



第2号住居跡出土土器3(第9图)



第2号住居跡出土土器4(第10图)



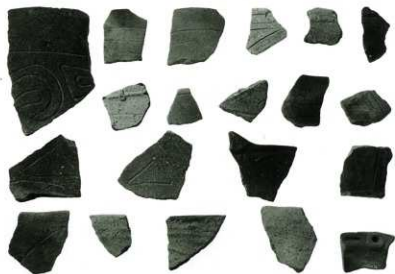
土城出土遺物(第14图)



包含層出土土器 1 (第15圖)



包含層出土土器 2 (第15圖)



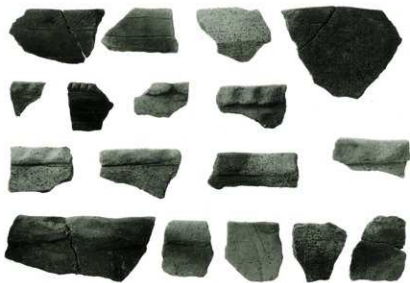
包含層出土土器 3 (第16圖)



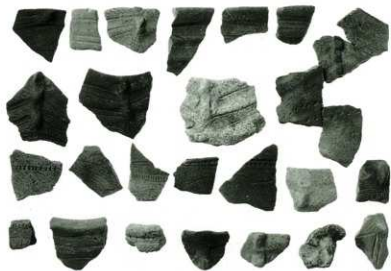
包含層出土土器 4 (第17圖)



包含層出土土器 5 (第17圖)



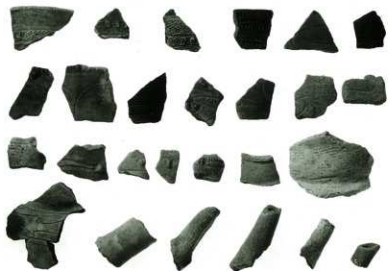
包含層出土土器 6 (第18圖)



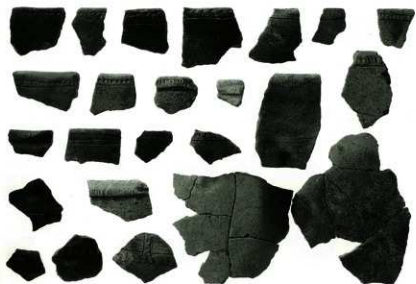
包含層出土土器 7 (第20図)



包含層出土土器 8 (第20図)



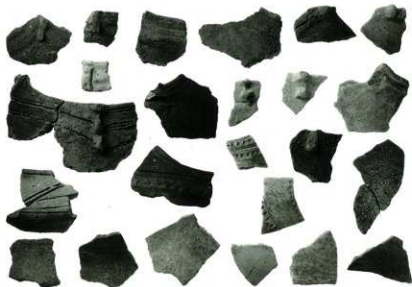
包含層出土土器 9 (第21図)



包含層出土土器10 (第21図)



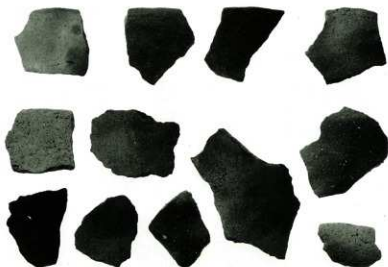
包含層出土土器11 (第22図)



包含層出土土器12 (第23図)



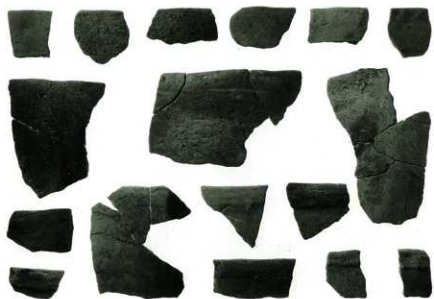
包含層出土土器13 (第23圖)



包含層出土土器14 (第23圖)



包含層出土土器15 (第24圖)



包含層出土土器16 (第24圖)



包含層出土土製品1 (第26圖)



包含層出土土製品2 (第26圖)



第2号住居跡出土石器 1 (第12图)



第2号住居跡出土石器 2 (第12图)



包含層出土石器 1 (第27图)



包含層出土石器 2 (第28図)



土壇出土遺物 1 (第34図)



土壇出土遺物 2 (第34図)



グッド出土遺物 1
(第37図)



グッド出土遺物 2
(第37図)



グッド出土遺物 3
(第38図)

報 告 書 抄 録

ふりがな		じょうしきめんきたいせき						
書名		上敷免北遺跡						
副書名		県道深谷妻沼線関係埋蔵文化財発掘調査報告						
巻次								
シリーズ名		埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書						
シリーズ番号		第248集						
著者氏名		木戸春夫						
編集機関		財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団						
所在地		〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台4-4-1 TEL0493-39-3955						
発行年月日		西暦2000(平成12)年1月28日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上敷免北遺跡	埼玉県深谷市 明戸776番地2他	11218	119	36° 12'30"	139° 18'33"	19980201 ～ 19980331	1,100	道路建設 に伴う事 前調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上敷免北遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代 中近世	住居跡2軒 井戸跡1基 溝跡18条 土壇15基	縄文土器 石器 土師器 陶磁器 土製品 石製品				

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第248集

深谷市

上敷免北遺跡

県道深谷妻沼線関係埋蔵文化財発掘調査報告

平成12年1月21日 印刷

平成12年1月28日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里村船木台4-4-1

電話 0493(39)3955

印刷／株式会社秀版舎